『送る言葉』

作者　淺羽一

《簡潔にして》

そして絵文字、ふくれた顔の記号。容量にすればたった数バイトでしかない内容を前に、敦也（あつや）はもう数十分もの間、ひたすら悩み続けていた。

時折、目を閉じ、携帯電話を持っていない方の手で頭を乱暴に掻く。けれど、一向に問題は解決しない様で。単なる癖として掻きむしられた頭皮は最早、かゆみを越えて痛みを感じているのだろう、いつしか彼の指は頭を掻くと言うより小刻みに叩くと言う感じの動きに変わっていた。

「くそっ」

突然、敦也が苛立たしそうな声を発した。どうやら、いい加減に頭が過熱してきたらしい。「あかん、ちょっと気分変えよ」。彼は寝ころんだままだった体勢から上半身を起こし、携帯電話をベッドの上に置き去りにして床に立った。少しだけ汗ばんでいた裸足の裏が、ひんやりとしたフローリングにぺたりと付いた。

二、三度、勢いよく顎を持ち上げるように頭を左右に振る。骨の鳴る大きな音が静かな部屋ではっきりと響いた。

それに満足したのか、ほんの少しだけではあったけれど、敦也の表情が軽くなった。それから大きな深呼吸を一回。ただしそれは、見ようによってはとても深い溜息を吐いた風でもあり、またその表情も「気が楽になった」と言うよりは、むしろ「何かを諦めた」と言う方が修飾として似つかわしそうなものであったけれど。

「とりあえず、風呂入ろ」

確認か、それともただの言い訳か、敦也はわざわざそう声に出した。とは言え、仮にそれが後者だったとしても、ならば誰に向けてのものなのかと問えば、彼自身にも答は分かっていなかったのかも知れない。

安い家賃と狭い１Ｋの間取りに相応しい、窮屈なユニット・バス。その中には小さな浴槽と洋式のトイレ、そこを仕切るビニール製の白いカーテンは畳まれたままで、トイレの脇には申し訳程度に備えられた洗面台と鏡。鏡に映っているのは、まだ二十三歳と言う年齢にしては少なからず疲れて老けた感のある男の顔。もしも百人の人間に「この男をどう思うか」という質問でアンケートを取れば、得られる回答の大半はきっと「中途半端」というものになりそうだ。事実、漆黒と言うよりは単に染めていないだけの黒髪に、敢えて時流に逆行しているのかと思えそうな太い眉毛、お洒落なのか地味なのか今ひとつ判然としない服装などは、まさしく「素材は悪くないだろうに、努力していない」といった印象を抱かせるものだった。

「何で、分かってくれへんねん」

と、まるで鏡の中と睨み合っているかのごとく洗面台の前に立ったままだった敦也が、ぼそりと洩らした。現実とあべこべの彼は、情けなく弱々しい顔をしていた。

「っつうか、考えてくれへん、やな」。敦也はそんな鏡像から目を逸らし、今度は吐き捨てるように言った。鏡の中の彼は、そんな問いから顔を背けていた。

便座を挟んで浴槽へと視線を落とし、はたまたシャワーの先端へと目を向け、敦也はしばしの間だけ逡巡するように動きを止めた。どうやら浴槽に湯を張るかそれともシャワーだけで済ますかを考えているらしい。と、やがて結論が出たのか、それともそんな事を考える事さえ面倒になったのか、敦也は着ていたシャツやトレーナーを脱ぎ、それらを入り口の扉から通路を挟んで向かい側に備えられている洗濯機へ適当に投げると、トランクス一枚だけの姿になってシャワーの先端を手に取った。そしてそれを浴槽の中に向け、もう片方の手で蛇口をひねる。途端、音を鳴らして吐き出される水。敦也は何度かそれを指先で弾いて温度を確かめる。やがて、うっすらと柔らかそうな湯気が生まれてきた。

湯を出したままのシャワーの先端を壁に掛け、いよいよ敦也はトランクスの縁に指をかけた。僅かに大きくなる水音。開けられたままの扉から、仄かな水気が地を這って通路へと逃げていく。早く扉を閉めなければ通路が湿ってしまうだろう。

それなのに、敦也はその状態で体を凍らされたみたいに、一向に最後の一枚を脱いでしまわなかった。濡れていた右手の指がトランクスの生地に作った小さな染みは、いつしか乾いて見えなくなっていた。

「…ちっ」。唐突に、舌打ちが一つ。浴槽を叩く水音に比べれば遙かに小さな音であったはずのそれは、けれど何故だか妙にはっきりと聞こえるものだった。直後、敦也は湯を出しっぱなしにしたまま浴室を出た。

足早にリビングへと戻り、ベッドの上の黒い携帯電話を掴む。折りたたみ式のそれを開け、ボタンを操作、メールの新規作成画面。いっそ乱暴とも言えるほどの勢いでボタンを打つ。空いている左手が、がりがりと頭を掻きむしる。やがて画面に並べられる文章。

〈頼むから、俺の言った事の意味をもうちょっと考えてくれや！〉

題名は無く、宛先には彼女のメールアドレス。

敦也は躊躇う間もなくメールを送信した。その様子は、ともすれば不安や葛藤を誤魔化している風にも見られた。

「……くそ」

メールの送信完了と共に全ての気力を使い果たしたのか、敦也は弱々しい呟きを漏らした。力無く垂らされた手が僅かに動き、持っていた携帯電話をベッドの上に放る。開いたままの携帯電話はほとんど音も立てなかった。シャワーの音だけが広くもない部屋を満たしている。

敦也は再び浴室へと戻り、今度こそトランクスを脱いだ。扉は開けたままだった。

シャワーの先端の向きを壁の方へと向け、浴槽の中に立ってカーテンを引く。小気味よい音が綺麗に鳴った。

そしてようやくシャワーの先端が彼へと向けられた。水音が変化し、細身の体に水滴が跳ねる。

両手を眼前の壁に突き、頭を差し出して降り注ぐ水滴を受け止める。黒髪が水流によって前へと流され、額と閉じた瞼を隠すように肌へ張り付いた。

しばらくの間、そのままの姿勢で敦也は湯を浴び続けた。その表情は髪と湯によって周囲から遮られていたが、だからこそ余計に頬を伝って足下へと落ちる水滴が何かを物語っているようにも見えた。足下では落ちた湯が溜まる間もなく排水溝へと流れて消える。

やがて敦也が体を起こした。彼はまず両手で顔面を強めにこすると、その手を上に滑ら

し、垂れた前髪もまとめて濡れた髪の毛を後ろへと流した。そしてもう一度、顔に付いた滴を払うように両手の平で顔をぬぐった。

敦也はシャワーの先端を壁から取ると、上から下へと順番に、身体の各部へ水流を当てていく。首筋、両肩、背中、両腕、脇の下、胸、腰、腹…。

全身をまんべんなく温めた敦也は、シャワーの位置を戻すと、蛇口の脇の狭いスペースに置かれているシャンプーのポンプを押した。添えた左手の平に出てくる半透明のシャンプー液。両手の平をすり合わせてそれを軽く伸ばすと、髪の毛に液をなじませながら頭を洗う。あっという間に泡だらけになる頭部。それでも彼は、白い泡にまみれた頭をさらに何度も何度も指でこする。

「…っ」

一瞬、敦也がうめき声らしきものを洩らし、動きを止めた。それから、ゆっくりと右手だけを髪から離して、顔の前へと持ってくる。泡が目に入る事を気にしてか、恐る恐るといった感じでうっすらと瞼を持ち上げる。引きちぎられた数本の髪の毛が、四本の指に絡みついていた。

「……」

ほんの数秒間だけ無言で右手を眺めていた敦也だが、やがてそれを振って髪の毛を落とすと、頭の泡を洗い流した。先ほどまでよりも僅かに両手の動きは丁寧になっていた。

そして彼は、今度は洗顔クリームを手にとって顔を洗う。終わると、カーテンを少しだけ開いて洗面台から歯磨き粉と歯ブラシを取り、歯を…。

…磨こうとした、その時だった。不意に、溢れる水音に紛れて甲高い機械音が浴室へと入り込んできた。

瞬間、敦也は思いきりカーテンを開くと、びしょ濡れの体も構わずに全裸のままで浴室を飛び出した。落ちた水滴と湿った足跡がリビングの床を汚す。けれどそれを代償にして即座にベッド脇へと辿り着く事が出来た敦也は、未だに鳴り続ける携帯電話を見下ろした。

刹那の逡巡の理由は何だったのか。それは濡れた手で精密機械を触る事への危機感だったのかも知れないし、はたまたもっと他の事へ躊躇いを覚えたからなのかも知れない。

しかし何にせよ、敦也は枕元に置いてあったティッシュで手をぬぐうと、画面を晒したままだった携帯電話を拾い上げた。ぼんやりと光る液晶画面には「メールの受信」を示す記号が浮かんでいた。

無言のままでボタンを操作し、受信メールの内容を確認する。送り主は彼女だった。彼の指の動きが止まった。

《もういい、もうたくさん》。それから数行開けて……《もう別れて》。

句点は無し。読点は辛うじて一つ。当然と言うべきか、絵文字も顔文字も見あたらない。

何度見直しても、画面にはたったそれだけの文章。一番下には《ＥＮＤ》の文字。ボタンを使って画面をスクロールさせる必要もない。唯一の救いは「題名」の欄が単なる「Ｒ」と「ｅ」の繰り返しでなかった事くらいか。ただし、それも結局は単なる空欄なので、果たして敦也が本当に救われた気持ちになっているのかどうか、実のところは疑わしい。

「何(なん)やねんそれっ」。敦也が悲鳴じみた叫びを上げた。髪から跳ねた水滴がぽたりと液晶画面に落ちた。

彼は慌てた様子で携帯電話を操作した。今度はメールではなく、電話をかける。いつし

か深夜二時半という時刻に対する遠慮は皆無だった。と言うか、そんな事を気にする余裕そのものがなさそうだった。

耳が痛いだろうほどに強く押し当てられた携帯電話からかすかに聞こえる、淡々とした呼び出し音。一度、二度、三度目の呼び出しが―。

…と、唐突に呼び出し音が切れた。直後、代わって聞こえてきたのは「ツー、ツー」と言うそれまで以上に無機的な単音。

絶句し、耳から離した携帯電話の画面を呆然とした面持ちで見つめる敦也。だが、それから一分もしない内に、彼はもう一度、同じ操作を繰り返した。けれど…。

今度は、呼び出し音すら鳴ることなく、いきなりの「ツー、ツー、ツー…」。どうやら着信を拒否されたらしい。

「…何やねん、それ」

力無く吐き出された声は、先ほどのものと同じ内容であったはずなのに、何故だか全く別の言葉にしか聞こえない。敦也の手から携帯電話が床へと落ちて音を立てた。

数瞬の静寂の後、いきなり敦也の喉が震え、唇が乾いた声を洩らした。そして彼は苦笑するみたいに片頬を持ち上げると、ようやく思い出したのか己の姿を見下ろした。

他に誰もいないとは言え、文字通りの全裸。湯気の消えた肌からは今も滴が床へと垂れている。慌てて走ってきた時に蹴飛ばされたのだろうか、床にまとめて置かれていたはずの服の一部は部屋の端にまで飛んでいて、さらに濡れた足跡の付いているものまであった。床に落ちた携帯電話はもう鳴らない。

「…アホやろ」

敦也はそんな自身と周囲の様子をひとしきり眺めた後で、鼻で笑って吐き捨てた。「情けな～、マジで。っつか、何なん俺」。

呆れた風な苦笑を浮かべたまま、彼は一人の部屋で言葉を紡ぐ。「ほんま、アホやろ」。それはまるで彼自身を含めた全てを笑い話にでもしようとするかのごとく。もしくは、そうでもしないと耐えられないと言う弱気を誤魔化したかったのだろうか。

「ええわ。先に、風呂や」

敦也は全てをそのままに、来た道を引き返した。一歩進むたび湿った足音が鳴った。

浴室へと戻った彼は、今度こそ扉を閉めた。狭い室内に反響するシャワーの音が一気に大きくなった。

それから敦也は、まるで時間を巻き戻そうとするみたいに、浴槽の中へと立ってシャワーを浴びる事を再開する。まずは冷めた体を温める為に湯をかけ、歯を磨き、今度は液状のボディーソープとスポンジを使って全身を洗い、やがて泡を流して…。

その都度、敦也は独り言を発していた。どうでも良いだろう内容を、次から次へと声に出して言葉に変えていた。まるですぐ傍に誰かがいるとばかりに話し掛けては、それに対して自らで答えていた。ずっと、ずっと、頭の中に浮かんだ事を片っ端から外に吐き出して、いつまでも頭の中を空っぽのままで保とうとするかのように。何かを考える事を、考えてしまう事を恐れているかのように。

「たまには長風呂もええよな～」

敦也は涙など流していなかった。

「で、結局、紀子ちゃんとはどうなったんよ」

晴れた日曜の午後。全国的に有名なファストフード店の店内で、窓際に沿って備えられた席に座り、外の通りを眺めていた敦也は、そんな質問に視線を外へと向けたまま淡々と答えた。「あぁ、別れたよ」。

すると、敦也の隣りに座って、彼よりも幾分かがっしりとした体格が放つ雰囲気とは裏腹に、ちびちびとフライドポテトを一本ずつ口に運んでいた短髪の男は、呆れたのか溜息を一つ吐いてから言った。「何でや」。

「……」

敦也は答えなかった。ただ、無言のままで手元の紙コップにささったストローに口を付けた。もう中身が空に近いのか、陰気な音だけが代わりに響いた。

「お前なぁ…」

今度こそ間違いなく呆れた声を漏らした男は、相変わらず彼の方を見ようとしない敦也の横顔に向かって言葉を紡いだ。「ええ子やったやんけ、マジで。お前、何してん」。

敦也は、そんな中学時代からの付き合いの友人に対して、のんびりとした口調で反論した。「っつうか、康二よ。何でいきなり俺が原因やねん」。

「男が女と別れる時なんざ、八割方、男の方が悪いやろ」

即答してきた康二に対し、敦也はようやくちらりと彼の方へ視線を向けて言った。「アホか、お前と一緒にすんな」。

敦也はすぐさま再び視線を外へ戻した。車の進入が禁止された幅広の通りでは、何人もの人間が歩き、はたまた立ち並ぶ店に出入りし、時折その場で立ち止まって笑い合ったりと、思い思いの方法で各々の休日を楽しんでいる。少なくとも、見るからに不幸そうな人間は見あたらない。

康二はそんないつも通りと言えばその通りの街の景色を、それとは対照的につまらなさそうにぼんやりと眺めている友人の姿に、「こら、あかんわ」と小さな呟きを漏らした。

それから康二は、彼もまた敦也に倣って視線を外へと向けた。過ぎ去った夏の名残を惜しむように、同時に秋の到来を楽しむように、街では涼しげな格好の少女や、落ち着いた格好の男など、色とりどりの服装をした人々がモザイク画めいた明るい通りを彩っていた。

敦也がメールで紀子に振られた夜から、早三日。彼自身はともかく、彼を取り巻く環境は平和そのものに見えた。陰気な音が敦也の手元から生まれて消えた。

相変わらずちびちびとポテトを食べながら、康二は「さて、どうしたもんかねぇ」と苦笑半分、困惑半分と言った感じの表情を浮かべた。

当然という言葉が相応しいのかどうかはともかくとしても、現に康二は紀子の事をある程度ならば知っていた。それは存在を、と言うだけでなく、どんな性格、どんな人柄をし

ているのかという事も合わせて。そしてまた、そうだからこそだろう、彼が完全に敦也の味方をしてやらなかったのも。まるで面識のない女が相手であったならば、康二ももう少しくらいは無条件で敦也の「言い訳」を受け入れてやれたのであろうけれど。

「お前はややこい男やからなぁ～」。細長いポテトを指先でつまんでぷらぷらと揺らしながら、康二がそんな事を言った。

「何やねん、それ」

すると「ややこしい」と言う表現に引っかかりを覚えたのか、敦也が少なからずカチンと来たらしい顔を康二へと向けて問うた。

だが、康二はそんな表情にも全く怯まずに、上に向けた指の動きを止めると、「そのまんまの意味やろ」。ポテトが折れる事もなく、くてっと体を倒して頭を垂れた。まるで康二の言葉に頷いているみたいだった。

「あれやろ。どうせ、お前が何かしら面倒(めんど)い事でも言ったりしたんやろ」

「面倒いって、何がや。俺が何を言ったっつーんよ」

「そんなん知るか。せやけど多分、何か余計な事をわざわざ言ったりしたんちゃうんか。そんで別にせんでもええ喧嘩とかして、って感じちゃうん」

敦也が黙る。どうやら図星だったらしい。康二はその反応に「はぁ～…。やっぱりな」と溜息混じりの呟きを漏らした。敦也はそんな態度に小さな舌打ちだけを返し、またしても顔を窓の方へと向けた。ただし、今度は「外を見ている」と言うよりも、単に気まずさから視線を逸らしただけのようだったが。

「で、何を言ったんよ」。康二はそんな敦也をのんびりと促す口調で問うた。

敦也は数秒間だけ沈黙を保った後、やがて「別に、大した事ちゃうんやけどな」と前置きをしてから話し出した。顔は相変わらず外を向いたままだった。「信じてない、ってわけじゃ、無かったんやけどな」。

敦也の声は、紀子との日々を思い出しているからなのか、康二に向けての言葉と言うよりはいっそ独白めいて聞こえた。同時にそれはまた、康二自身も感じていた事なのだろう。きっとそうだからこそ、彼は敦也の語りが一息吐くまで必要最低限の相槌以外のほとんどを口にしなかった。

「ただ、何て言うか…。伝わってないのかもって、ちょっと不安になったんよ」

敦也はそう言うと、紙ナプキンで両手を拭いて、ズボンのポケットから携帯電話を取り出した。そしてそれを開くことなく、右手の中で弄びながら言葉を続けた。「俺ってさ、結構はっきり言うやん。『好きや』とか、『惚れてる』とか」。

「あぁ」

「でも、あいつはほとんどそう言う事を言わへんタイプでさ。それはまぁ、性格的なもんとかもあるから、別に良いっちゃ良いんやけど…」

言いながら、敦也の声は僅かずつ弱くなっていた。けれど、一拍の間を置いただけで彼はまたすぐに声の調子を戻して続けた。「ちょっと前にさ、港の方までドライブに行ったんよ。夜景でも見よかって、湾岸線を下から回り込んで。あれ、いつやったかなぁー」。

そこで敦也は片手で携帯電話を開いて、ボタンを操作した。小さな画面にカレンダーが表示される。「あぁ、そうや。九月のど頭や。あいつの大学の夏休みが終わる直前やったもんな」。

正確な日付を思い出して満足したのか明るい声を出す敦也。だが、果たしてそれは本当にその為に携帯電話を操作したのだろうか。敦也は何度か「そうそう」と言いながら、携帯電話のボタンを押した。康二はそれを黙って見ていた。すると敦也は、「…ま、そんな細かい事はええわな」と携帯電話をパタンと閉じて、話を元に戻した。「神戸とかも綺麗やけどさ、南港ら辺の臨海地もかなり綺麗やろ。それに、天保山にはでっかい観覧車とかもあるしさ。あれ乗ったら、もう大阪の街も海も一望って感じやん」。

「あぁ、せやな」

「しかも、あの日はまさに快晴、って感じでさ。マジで夜景は綺麗やったし、平日やったから周りのレストランもわりかし空いててな、の～んびりと楽しめてさ。もう文句なしって感じやったんよ」

「完璧やんけ」

「まぁ、そこまでは、な」

敦也はそこで康二の方を向き、紛れもない苦笑を浮かべた。それから軽く頭を掻きながら言った。「飯を食ってから、ちょっと海沿いを散歩してな。そんでまぁ、何や、何つーか『ええ感じ』になったんよ。実際、風とかも良い感じに涼しくて、街灯の雰囲気も良かったし」。

「あぁ」

「そしたらさ、こっちもその気になるやん。ほな、ちょっとキスの一つでも狙ってみるか、みたいな。一応、俺も健全な男の子やし」

康二は敦也の言葉に苦笑しながら「まぁ、一応な」と返した。

「せやろ？」

そんな彼の態度に軽く笑った敦也は、けれど「でまぁ、適当に歩いてる内にベンチを見つけてんけどさ」と言った途端、急にその表情を曖昧なものへと変えた。「向こうも何となく気付いてたんやろ。雰囲気で分かるもんやん、そう言うのって、お互いに。そんでまぁ、しばしの沈黙ってやつがあってさ。それから遂に俺がキスしようとしたら、さ」。

敦也は一度だけ言葉を句切り、やがて本当に簡単に、いっそおどけている風な口調で言った。「軽く拒否、みたいな？」。ただしその表情は相変わらず、「笑み」と呼べそうでいて呼べなさそうな、微妙なもので。康二は何も言わず、笑いもしなかった。

「嫌なら嫌って、言うてくれたらええやん。いやまぁ、そんな事を直接に言われんのも、かなりきついもんがあるやろうけど。でも、黙って顔を逸らされるよりはマシやろ。しかもさ、その後も言い訳とか一切無しでひたすら無言て」

「……」

「それまでがほんまに普通に楽しかったからさ、こっちとしても『何でなん』みたいな」

そして敦也は「怒るとかってよりも、単純に驚いたって言うか、ほんま純粋に『何で？』って感じでさ」と、おそらく本心だろう想いを口にした。それから続けて、「ま、これが最初のってわけでも無いんやろうけど、それでも確かにきっかけやったかな」。

対して康二は、しばらくの間、考えるように沈黙を返していたが、やがてゆっくりと口を開いて言った。ただ、その口調は何とも苦しそうなものであったけれど。「それは、何て言うか…。ほら、気分とか、あるやろ。今日はそう言う事をしたくない、みたいな」。

「まぁ、せやろね」。敦也は素直に頷いた。その後で、こう言った。「せやけど、そうや

ったら余計に、ちょっとは言い訳とかあってもええやろ」。
「それは、まぁ…」
康二が眉根を寄せて僅かに頬を引きつらせる。見るからに、そうだと思ってはいるものの、けれど肯定する事を躊躇っていると言う表情だった。
敦也はそんな友人の様子に、ゆっくりと困ったような笑みを浮かべて言った。「その後の帰りとか、ひたすら無言やで。なんぼど気まずいねんな」。
康二は「…んで、結局はそれで怒って喧嘩かよ」と敦也に問うた。
敦也はそれに短くも明確な答を返した。「ちゃうよ」。
本当に、それはとても簡単な回答で。康二にとっても意外だったのだろう、彼はきょとんとした顔で「は？」と声を漏らしたまま固まった。
それを見た敦也は「いや、そんな事くらいだけで怒ったりせんし」と、彼の方こそ逆に呆れた声を返した。「肝心なんは、その後よ」。
「後？」
「そ。その後の、メール」
敦也は再び携帯電話を開きながら、言った。「マジでさ、その時はそれほど怒ったりとかしてなかったんよ。そりゃまぁ、ショックはショックやったけど、でも真剣にむかつくとか切れるってほどじゃなかったから。だって、お前の言った通り、あるやん、そんな気分とかって。例えば飯を食った直後やったから嫌やったんかも知れんし、もしくはむしろ雰囲気が良すぎて逆に恥ずかしなりすぎたとかってのも、まぁ、無い事は無いんかもな。っつうか、大した理由じゃないからこそ、逆に言いづらかったんかも知れんし」。
「……」
「それにさ。浮気を隠してたり、もうすでに俺の事を嫌いになってたとかやったら、たかがキスくらい芝居で誤魔化したり、もしくはそもそもあそこまで楽しい感じにはなってなかったやろうしな」
唖然とした面持ちで敦也の言葉を聞いていた康二に、敦也は「せやろ？」と言わんばかりの視線を送った。するとそんな敦也の眼差しを受けた康二はお返しのつもりか、「こいつは、ほんまにややこい奴やなぁ」と言わんばかりの溜息を吐いてから、問うた。「…で。そんだけ分かってたんなら、何が気に入らんかってん」。
敦也はそれに対して答える代わりに、逆に新たな問いかけを返した。「お前さ、メールってどう思う」と。
「どう、って…」。戸惑った声で答える康二。「それこそ、どういう意味でよ」。
「だから、何つーか、その…」
すると敦也は少しばかり言葉を探すようにもごもごと言った後で、「…ぶっちゃけ、メールで気持ちって伝わると思うか」と、やけに真面目な感じの質問をした。
「そらまぁ、時と場合に寄るやろ…」。突然すぎる質問に困惑したのか、曖昧な答を返す康二。
「ま、確かにな」
対して敦也はうんうんと頷いた後で、「でもな、俺は『絶対に無理や』とは言わんけど、それでもかなり難しいと思ってんねん」と言った。
「俺はマジで、あいつを責めたりとかって気は、全く無かったんよ」。敦也は続け様に

そんな事を言いながら、手元の携帯電話を見下ろした。
「どういう事よ」。康二は敦也の視線を追いかけて彼の携帯電話を見つめながら、そう聞いた。敦也はやはり携帯電話の画面を見たまま口を開いた。「言ったやろ。怒ったりとかじゃなくて、ただ単純に理由が知りたかっただけなんよ」。
「あぁ」
「だからあの日、部屋に帰ってからメールしたんよ。『何で?』って」
敦也が携帯電話を操作すると、しばらくしてその時の送信メールが液晶画面に現れた。宛先は〈紀子〉。題名の欄には〈お疲れ様〉と温泉マーク。そして本文には…。
〈どういうつもりやったんや?あの時。言ってくれんと、分からんて〉
加えて記号を組み合わせて作られた顔文字。見た感じ「笑いながら汗をたらりと垂らしている」風なもの。
「絵文字も使った方が良いかなって思ったんやけどさ。でも、変にわざとらし過ぎんのも、何か逆にあかんかなって思って。で、これ。黒一色」
「返事は、どうやったんよ」。敦也の横から携帯電話の画面を覗き込んでいた康二が、顔を上げて彼に尋ねる。
敦也は答える代わりにボタンを操作して…。
《ごめんなさい。》
やがて一つの受信メールの内容が現れた。題名は空欄。返信の時刻は敦也の送信メールのものから三十分ほど後。
「…え、これだけ?」
さすがに本文の短さに驚いたのか、画面を凝視したままで疑問の声を上げる康二に、敦也は「反応に困るやろ?」と苦笑混じりの声を返した。
「言い方は悪いけどさ、ちょっとばかし狡くね?まぁ、向こうとしては『察しろよ』って事やったんかも知れんけど。でも、ただ謝るだけって…。しかも、何や妙に他人行儀っつうか、事務的な感じの文面で」
「う〜ん…」
「お互いにメールだけやと、口調とか表情とかが無いから、余計に文章で想像するしかなくなるやろ。かといって真面目な話してんのに、明るくしたいからって変に絵文字とか使ったりしたら台無しな感じするし。でも、そしたら、どうしてもこっちの先入観や思い込みも入るし、何かどんどん向こうの言いたい事とかが分からんようになってしもてさ」
「で、結局、お前はこれに何て返してん」
「正直、このメールを見てからちょっと苛ついてきてさ…」
康二の問いかけに敦也はそんな前置きをした後で、「そんで思わず、『お前、何も分かってへんな。俺は別に謝って欲しいんじゃない』みたいな事を一方的に送ってしもてさ。やばいと思った時には、もう『送信済』やったわ」と言った。康二はそれに短く「そうか」とだけ返した。
「今にして思えば、あの時、メールじゃなく電話しとけば良かったんかもなぁ」
「けど、それだけで別れるってとこまで行かんやろ」
「まぁな。でも、この日の事がきっかけで何か変にずれてしもてさ。元々、俺と紀子じゃタイプが違ってる所もあったし。『好き』って言う言わんってのもそうやけど、何て言う

か表現の仕方みたいな部分で根本的に違ってたりさ」
「何やお前、紀子ちゃんから『好き』って言ってもらえんかったから拗ねたんかよ」
「ちゃうて。っつうか、あいつの好意を信じてなかったとかじゃないんやて。何て言うか、むしろ逆」
「逆って？」
「俺の気持ちこそ、向こうに伝わってないんやって思ったんよ。俺がいくら『好きや』って言っても、あいつはそこに俺が思ってるほどの価値を感じてないんやろな、って」
「そんなん、お前の被害妄想ちゃうんか」
康二の声に苦笑めいた呆れが混じる。すると敦也はやけにあっさりとそれを認めた。「そうかもな」。
「かもな、って…」
「でも、俺がこんなことを感じたって事は、そもそも向こうにしてみても同じ様な感じやったんよ、多分」
「…まぁ、それはあるかもな」。少なからず言いにくそうではあったものの、康二は敦也の言葉を肯定した。
敦也は軽く頭を掻く仕草を見せてから、「って言うか、現に向こうにもそんな事を言われたしな」と言った。
「そんでまぁ、それからも何度かメールのやりとりをしてたんやけどさ。でも、どうしても深刻って言うか、そっち系の話みたいなんが多くなるようになってしもてさ。そしたら、そのたんびに言い合いじゃないけど、やり合いみたいな感じになったりして」
「直接に会って話せば良かったやんけ。お前の持論やったら、メールよりもそうするべきやろ」
「間違いない。でも、あいつ実家暮らしやしな。平日はお互いに忙しかったし。せやから て、その為に外で会う約束をしようにも、その前にそんな話のせいでお互いに冷静じゃなくなってしもててさ」
「それは言い訳やろ～。うだうだ言う前に、会いに行けば良かったやろうが。何の為の車やねん」
「いや、ほんま、その通りなんやけどな」。敦也は「気付いた時には、もう手遅れやったな」と寂しげに言った。
「…ったく。お前はほんまに、ややこい男やなぁ。普通はそんな小難しい事、いちいち気にしたりせんもんやぞ。喧嘩するにしたってもっと分かりやすいわ。何やねんな、その仲直りの仕方も複雑そうな喧嘩」
「分かってるて」
康二の言葉に、自分自身でも分かっている欠点を改めて他人から指摘された時の中学生じみた顔をする敦也。康二はそんな敦也の態度に、「紀子ちゃんも難儀な奴と付き合ったもんや」と溜息と共に吐き出した。
「うるさいっちゅうねん」
そう言って敦也はひらひらと右手を振ると、「もうこの話はしまいや」と携帯電話をポケットにしまい、やがてトレイを持って席を立とうとした。
「後悔してんのか」

だが、彼が完全に立ち上がる寸前、そんな敦也に康二は真っ直ぐな視線を向けてそう聞いた。

「…さぁ、どやろ」。敦也はまるで自嘲するみたいに鼻で笑うと、「きっかけはどうあれ。それからのメールの内容にしても、感じた気持ちにしても、嘘を吐いたり、誤魔化したりって事はなかったからな。結構、真剣に考えてやりとりしてたつもりやし」と言った。「後悔とか未練は、あんま無いかも。むしろ、後悔せんように行動した結果が、たまたま最悪のものになってしまっただけって感じやし」。

「言うてる割には全く『気にしてない』って感じじゃないけどな」

「まぁなぁ」

そして敦也は康二の言葉に何処かぼんやりとした声を出すと…。

「要は、寂しいんやろ。好きな相手と分かり合えへんだって事が、単純にさ」

まるで他人事のように、そう言った。

3

誰にどれだけの事情があろうとも、世界は変わらず流れていくし、時間は決して止まらない。十月も半ばを過ぎると季節は夏の匂いを完全に消し、景色の色合いは秋の深まりを教えてくれる。紀子との別れからおよそ一月(ひとつき)。敦也は日々の生活に没頭するように、と言うよりも、むしろ単調な日常に同化するように毎日を送っていた。無理矢理に何かを詰め込んで思考を誤魔化すのではなく、いっそ全てを頭から消し去って何も感じずにいようとするかのごとく。派手さも豪華さも絶望もなく、悲劇にも喜劇にもなりそうにない毎日の繰り返しは、そうする為のものとしては都合が良いほどに最適なものであっただろう。

だが、そんなまるで淡々と薄紙を貼り重ねられていくだけの敦也の時間に、ある日、ほんの些細な異物が混じる。それは、あっという間に新たな紙が上から貼られ、その姿そのものは見えなくなるのに、けれど上から触れば確かにそこに異物があると感じられそうなものだ。とは言え、それさえも時間の経過と共に、いつかは厚くなった紙に覆われて消えて無くなる。現に、敦也は最初、それを無視していた。そしておそらくは、それで終わるだろうと思っていたのだろう。それに、確かにそれは本当に、彼にとっては無関係なものであったのだから。しかし、それにもかかわらず異物はずっと敦也の日常に違和感を残し続けた。なぜなら、それはたった一つだけでは終わらなかったからだ。

そもそも、そのメールが初めて敦也の携帯電話に届いたのは、後一週間と少しで十月も終わろうかと言う頃だった。

《どうして電話に出てくれないの？》

見知らぬ、と言うか携帯電話にメールアドレスが登録されていない相手からのメール。しかも内容は意味不明、いや、意味は分かるが全くもって心当たりのないもの。

きっと多くの場合がそうであるように、敦也はそれをあっさりと無視した。わざわざ削除する事はしなかったけれど、かといってそれに何らかの反応を示す事も皆無だった。たった一度、間違い電話が掛かってきたからと言って、わざわざそれに電話を掛け直す人間は少ないだろう。

ただ、電話とメールの明確な違いは、改めて返事がない限り相手の反応を確かめる事さえ出来ないと言う事だ。つまり、それがそもそも「間違いである」かどうかさえ、送った本人には分からないものなのだ。だとすれば、それはきっと不安だったのだろう。当人にとっては真剣な想いで送ったメールだったからこそ、理由も分からずに無視をされるという事は。

《どうして何も応えてくれないのよ！》

二通目のメールが敦也の携帯電話に届いたのは、二日後の夜の事だった。

「どうしたもんかね」

遅めの夜食を済まし、カーペットの上に直に座ってのんびりとドラマとバラエティー番組のチャンネルを行ったり来たりさせながらテレビを眺めていた敦也は、唐突に受信したメールの内容に億劫そうな呟きを漏らした。

誰かも知らない、いや、本当に知らないのかどうかさえ分からない相手。当然ながら、おそらくは女性なのだろうが、その彼女がどういう事情でメールを送っているのか、敦也に分かるはずもない。ただ、一つだけ確かな事は、この彼女は本気で敦也のメールアドレスを目的の相手のものであると誤解しているらしいという事だ。つまりは、このまま放っておいても間違いメールが無くなる可能性は低そうだという事だ。少なくとも、彼女が諦めるまでは。

「うーん…」。敦也が鼻から声を出したような音を鳴らした。どうするべきか悩んでいるらしい。

と、そこで敦也は何かを思い出したのか、「あ」と小さな声を漏らして携帯電話を操作した。画面には、その謎の相手から最初に送られてきたメールが表示される。

「やっぱ、『着拒（ちゃっきょ）されてる』とかなんかなぁ」。呟いた敦也の顔には、柔らかくも苦い笑みが浮かんでいた。同情と共感と呆れを等しくない交ぜにした風な表情だった。

「けどな～。電話番号を知ってんなら、メルアドも一緒に登録してんちゃうんか。そこだけ間違えて、とかって…。今時あんのか、そんな凡ミス」

あれこれと独りごちながら手の中の携帯電話を弄ぶ敦也は、言葉を発する事が目的と言うよりも、己の中で結論を出すまでの時間をそれで埋めているといった雰囲気だった。「でもなぁ～。それって、かなり微妙な賭けではあるよなぁ～」。事実、どうやら彼の頭の中では、取るべき行動の候補がもうすでに存在しているらしい。今ひとつ、それに対して踏み切れないだけで。

「…けどま、しゃあないか」

と、そこで敦也はそんな呟きを発すると、再びメールの内容に目を落とした。そしてそのまま続けて携帯電話を操作し、つい先ほどに届いた二通目のメールを表示する。しばらくの間、無言でそれを眺めていた。

「何にせよ、早い方がええやろうしな」

やがて敦也は軽い溜息と共に言葉を吐き出すと、ボタンを押した、メールを返信する為

に。メールの新規作成画面の中には、アルファベットと数字を組み合わされた見知らぬアドレスと、返信を示す「R」と「e」、「:」があらかじめ表示されていた。メールアドレスの後半を見れば、相手の使っている携帯電話の電話会社が敦也の契約している所と同じである事が分かった。

敦也はボタンを押していく。

〈アドレス、間違ってるで。〉

しかしそこまで文章を打ち込んだ所で、何を思ったのか、敦也は一度それを全て消した。

それから改めて文章を作り直す。

〈メールの宛先、間違えてますよ。〉

その後、十秒ほどその文章を見つめていた敦也は、納得したのかよどみなく指を動かした。〈メール送信中〉。液晶画面に封筒がひらひらと舞いながら飛んでいく映像が流れる。結果、五秒と待たずに〈送信完了〉の文字が浮かんだ。

「ま、これでええやろ」

満足したのか、敦也は携帯電話を閉じるとそれをベッドの上に放り投げ、代わりにテレビのリモコンを手に取った。

指の動きに従って次々と映像を変えていくテレビの画面。さして大きくもないそこに脈略無く映し出される世界の切れ端を、彼は大して面白くもなさそうな顔で眺める。

ドラマを見ては、すぐに展開に飽きたのかチャンネルを変え。クイズ番組を見ては、正解を見ただけで問題も知らないままチャンネルを変え。お笑い芸人のコントを見ては、くすりともせずにチャンネルを変え。ニュースを見ては、美人のキャスターが喋り終わると途端にチャンネルを変え。果ては国営放送で国会中継らしきものが流されている事を知ると同時にチャンネルを変える、一秒も見ずに。

敦也はそんな事を延々と繰り返しながら時間を潰していく。そんなにつまらないのならば他の事をすればいいのに、他にもすべき事はあるだろうに、それでも彼は一向に立ち上がる気配を見せなかった。ただ、代わりに一言。

「おもんないなぁ」

そうして全てのチャンネルを見終わると、再び最初から同じ事を繰り返していく。

唐突にベッドの上の携帯電話が鳴いたのは、さらに二回りほどした頃だった。

それは有り得ない事なのだろうけれど、あまりにも気怠そうな敦也を見かねて携帯電話が彼に声を掛けた、そんな幻想をうっすらと抱いてしまえる程度には見事なタイミングだった。「メールか?」。実際、敦也は新しい変化に即座に食いつき、黒い塊に手を伸ばした。

そして…。

「…うあ」

受信メールを確認すると同時、気さくな返事にはほど遠いうめき声を洩らした。敦也の視線の先にある受信メールのリストの一番上に表示されていたものは、やはりと言うべきか例の見知らぬ相手のアドレスだった。

敦也は、一瞬だけ躊躇う素振りを見せたものの、すぐにそのメールの本文を画面に映し出し…。

「あー…。やっぱり、そっちかぁ…」

その内容を見た彼は、心の底から疲れた感のある声を出した。

《ふざけないでっ‼何よそれ、馬鹿にしてる⁉》

感嘆符などに鮮やかな色が付いているものの、それらはメールを明るく彩ると言うよりもむしろ、単純に送り主の激情をそのまま表現している風に見えた。

「いやまぁ、予想はしてたけどさぁー」

敦也は苦笑を浮かべると、「どうすっかな」と言いながら指先で頭を掻いた。

「受信拒否は……なんか、可哀想な気もするしな」

ぽつりと洩らされた敦也の言葉。それはそんな弱々しいとさえ思える口調だからこそ、彼の本心を語っているだろうと感じさせられた。

けれど、かといってどうするべきなのか上手く結論を出す事は出来ないのか、敦也は手の中で携帯電話を開いたり、またそれを折りたたんだりと、進展のない仕草を繰り返しながらテレビの中へ視線を向けた。ただし、その表情は「テレビを見ている」という雰囲気のものではなく、むしろ「何も見ていない」と言った方がしっくり来そうなものだった。

と、その時だった。いきなり敦也の手の中から電子音が鳴り響いた。続け様のメール受信。思いがけないタイミングだったのだろう、敦也は少なからず驚いた顔になって携帯電話を操作した。すると…。

《誘ってきたのも、番号とか教えてきたのもそっちからじゃない！嫌なら嫌って、はっきり言いなさいよ卑怯者‼》

当然と言うべきなのか、相手はやはり同じ「彼女」で。画面に現れたのは、激しい非難の内容だった。

一瞬、言葉も忘れたように画面を凝視していた敦也は、しかし直後、ほとんど反射的にといった感じで声を上げた。「何でやねんな」。

それは怒っていると言うよりも、心の底から呆れているだろう口調で。また、言外に「そんな気の強そうな女やから、相手も嫌って言えへんだんちゃうんか」とでも言いたげな気配をにじませているものだった。

「う～ん」

困り顔で唸る敦也。ただ、それは「どうして良いか分からないから」と言うのではなく、まるで「その選択をすることに僅かな躊躇いを覚えている」と言えそうな感じのする声音だった。やがて彼は、その事を証明するかのごとく、「まぁ、このままやとキリないしな」と割り切った口調の独り言を吐き出すと、明確な目的の下に指を動かした。

そうして紡がれる返信用の文章。〈いや、っつーかマジでちゃうし‼もっぺんアド確認しぃや〉。

それから最後に「怒り」を表す十字型の血管の絵文字。だが、敦也は一度だけそれを上から読み返すと、その絵文字を消して代わりに〈‼〉に変えた。そして送信。

あっという間に送信は完了され、携帯電話の画面にはいつもの待ち受け画面が表示される。敦也はしばらくの間それを無言で眺めると、やがてそれを閉じた。それから今度は携帯電話を手の中に残したまま、ＣＭ中のテレビ画面に顔を向けた。偶然にも、そのＣＭは敦也が使っている携帯電話会社の新機種の宣伝をするものだった。パジャマ姿の流行の若い女優が何着もの洋服を並べられたベッドの上に立ち、難しい顔をしながらも携帯電話の新機能によって華やかに飾られたメールを送信すると、それを受け取った大学で講義を受けていた最中のアイドルの青年が、こっそりと内容を見た途端に大げさに驚いて衆人環視

の中で小躍りするというもの。最後に、手を繋いで街を歩く二人の後ろで、何人もの男女の声が重なった「まずは想いを伝えよう」と言うメッセージが流れる。

そんなたった十数秒が過ぎた後には、ＣＭの目的もまた次のものへと移り、画面にはそれに合わせて別の内容が流れていく。けれど、敦也はもうすでに新しい映像を前にしながらも、そのＣＭに対しての感想を口から滑らせていた。「そんな簡単にいくかいな」。

それはもしかしたら、「そんなに簡単にいければ良いのに」と言う本心を天の邪鬼的に表現した言葉なのかも知れない。事実、気怠げな声には、しかし僅かながらも羨望の色がにじんでいた。きっともしも仮に、そんな携帯電話の新機能によって本当に心と心を互いに通じ合わせる事が容易になると言うのであれば、彼はすぐさま小売店に行って機種の変更を申し込んでいただろう、そう思わせてくれる雰囲気すらあった。

それから敦也は再びつまみ食いするみたいにテレビの番組を眺め始める。相変わらず携帯電話を手放す事もせず。そしてだからこそ、おそらくそれは彼にとって単純に「時間を潰す」と言う目的の行為でしかなかったのだろう。つまり、「待つ」と言う。どうやら、敦也の中には何らかの確信めいた考えがありそうだった。

やがて、五分ほどが経過しただろうか。敦也の手の中にあった携帯電話がチカチカと光り始め、彼はそれが着信音を発するのも待たずに意識を向けていた。

即座に開かれる新着の受信メール。そこには一行にも満たない文章だけがあった。

《…本当に？》

敦也はもうそれに対して言葉を発しなかった。彼はただ、その短い文章を何度も何度も読み返すように凝視する。まるで、そこに秘められた想いを正確に感じ取ろうとしているかのごとく。

ただし、それは純粋に優しさや同情から来る行為なのかと言えば、何故だか「そうだ」と言い切る事ははばかれるほどの真剣さを纏っていた。

彼は新規メールの作成画面を表示させ、真っ暗闇の中を手探りで進むほどの慎重さで指を動かし言葉を並べていった。

〈悪いけど、俺〉

だが、そこまで文章を打った時、不意に彼の動きが止まった。そして再び指が動きを再開した途端、せっかくの文章が全て消されて画面は白紙に戻される。

それからも、彼は何度か新しい文章を作ろうとし、けれどその度に全て消して一から作り直すと言う行為を繰り返した。時折、軽く頭を掻きながら。

〈しつこいねん！ええ加減に〉

〈関係ないし。マジで〉

〈いや、ほんまにそうやし〉

どれもが途中までしか続けられず、また消される時には数秒さえ躊躇されなかった。

いつしか、最初の文章が消されてから早くも四十分以上が経過していた。

それでも一向に敦也のメールが完成する気配はなかった。携帯電話は、それを待っているのか、その間に一度たりとも鳴く事はなかった。

言葉を生んでは、殺し、また生んでは、殺し…。そんな代償を払ってでも、少しでも、ほんのちょっとでも、理想通りの文章に、思い通りの「想い」の表現に近付けさせたいと願う風に。そこには最早、意地や見栄やプライドなど通り越した、悲壮ささえ漂う必死な

気持ちが滲み出ていた。
相手が誰かも分からない、そもそもただの悪戯かも知れない、そんな曖昧で無関係とも言える事に対して、どうしてそれほどまでに向き合えるのか。それはもしかしたら、そんな顔のない相手だからこそ、逆に「誰にでも当てはめられたから」なのかも知れない。そうする事によって、例え錯覚に過ぎない慰めだったとしても、いつかの悔しさや哀しみを今になって取り返そうとしているのであれば、それは確かに彼にとっての救いに成りうるのだろう。
やがて遂に、敦也は一つの文章を作り上げた。今度こそ、それを消す事もせずに。
〈何つーか、悔しいんやろうし、ってか、そもそも事情も良く知らんくせにって感じやろうけど。誰かを恨み続けんのって自分を一番傷つけるから。そんなん、勿体ないで。〉
それから彼はしばらく悩んでいたのか指を止めて。数秒後、一行開けて、こんな一文を付け加えた。
〈無理して急ぐ必要も無いやろうけど、ちょっとずつで良いから、元気だし〉
笑顔の絵文字や、顔文字を試すように末尾に付けるも、結局は全て消して句点を一つ。
それこそが、敦也が悩みに悩んで作り上げた相手へと送る為の文章で、同時に悪い言い方をすれば自己満足の結晶でもあった。きっと彼自身、冷静な部分ではそれをちゃんと理解しているのだろう。「ほっとけよ、って感じやわな」と、自嘲めいた笑みと共に呟きが漏らされた。
けれど彼は結局、それをもう一度だけ読み返した後で、そのまま「彼女」へと送信した。
送信が完了する最後の瞬間まで携帯電話の画面から目を逸らす事はなかった。いつしか、一時間半もの時間が経過していた。
汗で湿った携帯電話をシャツの裾で軽く拭くと、敦也はそれをベッドの上に放り投げて立ち上がった。振り返る事もなく部屋を出て浴室へと向かう彼に、後悔しているという気配は無かった。全てをやりきって清々しさを感じているとは、お世辞にも言えそうにないが、それでも後悔だけは抱いていなさそうだった。強いて表現するならば、「どうとでもなれ」と開き直っている感じだろうか。
一分ほどの後には扉を閉められた浴室から一度だけ水洗トイレの音が響き、続けて勢いよく浴槽を叩く水音が洩れてきた。付けっぱなしにされたテレビの音と水音が、リビングを渾然と満たす。
だが、逆に言えばそれだけだ。
そしてその日、敦也の携帯電話が再び音を鳴らす事は無かった。

4

《この間は失礼しました。》

突然のメールに添えられた題は、素っ気なくも感じられそうな短いものだった。

だからだろう、仕事が終わってそのメールに気付いた敦也が最初に口にした言葉と言えば、「律儀やなぁ」と言うほのぼのとした呆れを表すものだった。だが、その後に控えていた本文の内容は、同様に丁寧ながらも、決して他人行儀という感じばかりを読む者に抱かせるものではなかった。

《本当に、ごめんなさい。あなたは悪くないのに、勝手な事を言ってしまって。》

まずは謝罪文。最後に数行開けて、《でも、嬉しかったです。ありがとう。》

鮮やかな絵文字も可愛らしい顔文字も何一つ無く、ただただ簡潔にも見られる内容だけれど、それはきっと敦也にとって少なからず価値のあるものであったはずだ。なぜなら、そのメールを読み終わった時、確かに彼はほっとした表情を浮かべていたし、また同時に嬉しそうに二度、三度とその文面を読み返したりもしていたのだから。あの夜のやりとりから三日。その時の敦也の雰囲気を一言で言い表すとすれば、「待った甲斐があった」と感じている風なものだった。

混雑する時間よりも幾分か遅い時刻に発車する電車は、満員の七割程度の人数（ひとかず）で埋まっている。座席は全て埋まっているし、通路を歩く為にはカバンを体に寄せなければならないけれど、一車両につき二箇所くらいは昇降口のドアにもたれて立つ事が出来る、そんな程度の混み具合。

車両から車両へと渡り、優先座席を避けて空いた座席を探していた敦也は、しかしそれを諦めて偶然に見つけた手近なスペースに体を滑り込ませた。少しばかり暖房の効きすぎた車両の半ばほどに位置する、今は閉じている側のドアの所には、片側に誰のものなのか大きめの旅行カバンが置かれているだけで、他に人間はいなかった。

旅行カバンと向き合って立ち、昇降口の脇の手すりに体をもたせかけた敦也は、自身のカバンを足の間に挟んで床に置くと、スーツの上着のポケットから携帯電話を取り出した。そして慣れた手付きでそれを開く。液晶画面の隅に「マナーモード」を示す記号が浮かんでいる。

改めて、敦也は「彼女」から受信していたメールを確認した。発車を報せるベルが響いた。甲高い笛の音の直後にドアが気怠そうな音を鳴らして閉じた。

動き出した車窓の向こう側になど目もくれず、敦也は小さな携帯電話の画面へと視線を落とす。「この急行列車はしばらく止まらない」と独特の口調で告げるアナウンスの隙間から、「ガタンゴトン」と鈍い振動が車内の空気を震わせている。周りを見渡せば、敦也と同じく顔をうつむけて手元の小さな機械の塊を真剣に見つめる人間を何人も何人も確認出来る。所々の窓の隅に張られている〈携帯電話はご遠慮下さい〉と書かれたステッカーなど誰も見ていない。

敦也は静かに携帯電話を操作した。現れたのは新規メール作成の画面だった。

数文字を打ち込んでまとまった単語を作るたびに、指を浮かしてボタンの上をさまよわせる。そんな行為を幾度と無く繰り返しながら、敦也は少しずつ文を伸ばして文章へと繋げていく。

しばらくして、それは完成した。電車はまだ止まらない。

〈少しは元気になれましたか？俺は別に気にしてないので、そちらも自分の事を一番に考えて下さい〉

末尾に優しく微笑む「穏やかな笑顔」。白い画面に黒い文字と並んで浮かぶ明るい色。題名は空欄のまま、最後に設定された宛先は言うまでもない。

敦也は二分間ほど迷った素振りを指先に見せた後で、親指を使ってボタンを押した。それまでに掛かった時間の長さなどまるで意に介さず、小さな機械は淡々とメールの送信を完了した。

敦也はようやく顔を上げると、窓の外へ目を向けた、畳んだ携帯電話を手の中に残して。彼にとっては飽きるほどに見慣れた景色が流れていく。偶然か、それとも彼自身が望んだ必然だったのか、高校、大学、そして二流と三流の間に位置するだろう今の会社に就職した現在と、敦也はもうずいぶんと長い間をずっとその景色を見ながら送ってきた。四角いガラスの外に広がる暗い空に星は見えず、翳った月はぼんやりと夜の中に紛れている。その下に広がる世の中は、敦也が目にしてきた時間の中だけでも、果たしてどれほどの移ろいを重ねてきたのだろうか。すぐ傍で見ていれば気付けるのかも知れない変化も、遠くから一緒くたにして眺めていると、よほどの事でない限り改めて意識する事は無い。

半分透けた窓に映る敦也の顔は、何を想っているのか、容易にはうかがい知れないほど特別な表情など浮かべておらず。だからこそ、逆に、それは見ようによってはどうとでも取れた。つまらない、虚しい、早く帰りたい、疲れた、寂しい、自分は何をしているんだろう、腹が減った、今夜の深夜番組はどんなものがあるのだろう、たまには入浴剤でも使ってみようか…等々。また、「待っている顔」だとも。現に今も彼は携帯電話を握っている。

果たして、敦也は本当に心から思っているのだろうか。もしくは期待しているのだろうか。「彼女」から再びメールの返信がある事を。

彼にとっては見知らぬ相手だ、まず間違いなく。些細なミスによって見当外れの相手にメールを送ってしまったり、電話を掛けてしまう事など、最近の個人の感覚では滅多にない事であったとしても、かといって全国的に見ればさして珍しくもない事だろう。そしてほとんどの場合は「間違えました、すいません」の一言で無かった事になる程度の些末な出来事だ。もしくは呆気なく無視して終わりだ。だからむしろ、ここまで数回のやりとりを彼らが行えただけでも、相当に奇妙な話だといっても過言ではないのでなかろうか。ましてや、あんな互いに踏み込んだ内容の文章を送り合うなど。

せっかくの貴重な経験なのだから、簡単に手放してしまうのは勿体ないとでも思っているだけなのか。だとすれば考えられなくもない。酒の席での笑い話くらいには、きっと今回の出来事は面白可笑しい体験だったのだろうから。道端に落ちている一円玉をまたいだとしても、五百円玉や千円札の上を素通りする人間は少ないだろうし、不審に思わない範囲でそれが続く限りは拾う事を繰り返すだろう。その後の処置は人それぞれであったとしても。

しかし、だとするのなら、つまりは所詮その程度であるとも言う事だ。現に、もうすでに笑って終わらせられるくらいには実験も重ねたはずだ。ちょっとしたラッキーとしてはもう充分だろうほどに。

けれど、敦也はまだ携帯電話を離さない。天井に備え付けられたスピーカーから車掌の声が流れてくる。もうじき一つ目の駅に停車するらしい。そこから、電車はこれまでよりも頻繁に駅に止まるようになる。敦也が降りるのはさらに三つ向こうの駅だ。

遠い感じのする車窓からの眺めに、妙に現実的なプラットホームの景色が割り込んでくる。一気に窓の外が明るく、狭くなる。立ち上がり、または網棚や床に置いていた荷物を掴む人間の動きで車内の空気がかき混ぜられる。

電車が止まり、敦也の場所とは反対側の扉が開いた。出て行く人間と入れ替わりに乗ってくる人間達。やはり彼らの中にも携帯電話を片手に持っている人間がいる。

しばらくして鳴り響く発車のベル、笛の音。乗り遅れた者を嘲笑うかのごとく淡々と閉まる扉。ガラスの向こうで走る事を諦めた人間が数人、不満そうに天井を仰いで足を止めた。

緩やかに電車は走り出す。再び窓の外が暗く、広くなる。

と、それから二十秒もしない内だった。敦也の手の中で黒い塊がぶるぶると震えた。

即座にそれを持ち上げる敦也、開かれた画面には〈新着メール一件〉と表示されていた。

少しばかりの間、静かに画面を見つめていた敦也だったが、ゆっくりとした動作で受信メールの確認画面を開いていった。まるで、万が一の不安を恐れ、逸る気持ちを無理矢理に抑え込んでいるみたいに。

やがて判明するメールの送り主。果たしてそこにあったのは、今となっては彼も見知ったアルファベットと数字と記号の羅列であった。

《本当に、優しいんですね》

とても短い文章。ただ、その最後には明るい色をした「笑い顔」が添えられていた。

敦也はすぐに新規メールの作成画面を開いた。一度だけ顔を窓の外へ向け、空いている方の手の指先で頭頂部辺りを掻く。しばらくして視線を携帯電話の画面へと戻した彼は、口の中で目的の文章を反芻しながら、ボタンを押した。

〈いや、別に優しくは無いやろうけどね〉。文末は幾度か記号や句点を試された後で、結局は「渦巻き模様」と言うべき絵文字で締めくくられた。敦也はそれを送信した。

滞りなくメールが送られた事を確認した敦也は、開けたり閉じたりパカパカと、携帯電話を手の中で弄ぶ。視線は外を向いていた。

何度か電車が踏切を通過し、その度に窓で遮られて多少くぐもった音がうねるように遠ざかっていく。そんな中で車掌のアナウンスが次の停車駅を報せてくる。また車内が僅かにざわつきを増す。敦也の携帯電話が震えた。

《そんな事無いよ！》

そのメールの内容に、敦也も短く返した。

〈そうかな？〉

ひらがなと「？」の間には「汗を垂らしながらの笑顔」と言う絵文字が挟まれている。

今度のメールの返信は早かった。と、同時に電車が駅に着く。

《そうだよ》。短い肯定に笑顔の絵文字。それから一行開けて、《ちょっとだけ、お節介だけどね》と、末尾に「歯を出して笑う顔」と言うからかいの絵文字を付けられた一言が添えられていた。

敦也は開いた扉からの人の出入りが落ち着くのを待ってから、メールを打った。その文章が完成するのを待っていたみたいなタイミングで、扉が閉まった。

〈そいつは、すんませんね〉。再び最後に「渦巻き模様」、送信。小さな画面の中で封筒がひらひらと舞う。その映像が消えるまでに二度、敦也の指が頭を掻いた。

それから数分間、敦也の携帯電話は沈黙を保った。途中、また次の駅に電車が止まり、入ってくる人数よりも多い人間が出て行った。車内がだいぶと空いてきた。しかし敦也は目立ち始めた空席に座る事もなく、立ったまま窓の外を眺めていた。どちらにせよ、次の駅で敦也も降りる予定だった。やがて、さらに数分が経過した。いよいよ敦也の地元の駅が近付いてくる。彼は携帯電話をポケットにしまうかどうか、一瞬だけ迷ったのかそれを見下ろすと、結局はそれを握ったままもう片方の手で床に置いたカバンを拾い上げた。と、そこで彼の選択の価値を認めるように、携帯電話がメールを受信した。今度の内容は、先ほどまでのものよりも多少なりと真面目そうなものだった。

《一つだけ聞いても良いですか？》

敦也はほんの刹那、それに首を傾げる仕草を見せたものの、滑らかにこう返した。〈良いですよ？〉。

メールはすぐに返ってきた。

《名前、何て言うの？》

その内容を見た敦也は、それに我知らずと言った感じで呟きを漏らした。「名前、か…」。頭を掻こうとしたものの、手が空いていない事に気付いたのか、敦也は両手を交互に揺らす素振りを見せてから「どうしよっかな」と独りごちた。

徐々に速度を落とす電車の車内、間延びした口調で敦也の降りるべき駅名が繰り返され、彼は携帯電話を見下ろしたまま体の向きをドアの正面に向けた。今度は敦也がいる方のドアが開く番だった。

敦也の指が動いた。

〈敦也って言います。そっちは？〉

間もなく完成する回答文。しかし、彼は数秒間だけそれを眺めると、再び指を動かした。そして一部を変える。

〈アツヤって言います。そっちは？〉

それから彼はそのメールを送信した。眼前のドアが開いたのは、それが完了するのとほぼ同時だった。

「おぉ、涼し」

車内に流れ込んできた外気にのんきな呟きを漏らした敦也は、人の波に急かされるように電車を降りると、今度こそ携帯電話をポケットにしまって屋根のないプラットホームを改札口へと歩き始めた。

「けど、微妙な天気やなぁ」

むき出しの夜空を仰いで感想を洩らす敦也だったが、表情はそんな陰気とも言える評価とは対照的に晴れやかなものだった。

およそ五分後、駅を出てのんびりと帰路に就いていた敦也の携帯電話が一件のメールを受信した。

《私はクミって言います》

文章の最後には明るい笑顔が添えられていた。

「何やお前、さっきから携帯ばっかちらちら見て。彼氏と付き合い始めの女子高生か」
的確なのか適当なのか今ひとつ判然としない喩えを使っての突っ込みに対して、敦也は「何がや」とある意味では分かりやすすぎる反応を見せた。
「いやいや、返しも中途半端かいな」
康二はそんな友人に対して心底から呆れた様子で息を吐いた。そしてさらに嫌らしい表情になって言葉を続ける。「っつーか、って事はマジかいな」。
「だから、何がやねん」
「そのメル友の子やって。惚れたんか」
「アホか。そんなんちゃうわ」
敦也はテーブルの上に置いていた携帯電話をさっさと上着のポケットにしまうと、片手を振って言い捨てた、まるで「もう聞いてくれるな」と言わんばかりに。康二はそんな友人をにやにやとした顔で眺めている。場所はいつもと同じファストフード店の窓際の席。最早、晴れた日曜の午後に限って言えば、そこは彼らの指定席になりつつあった。二人の中央に置かれたトレイの上は、もうとっくにポテトの一本さえ残らず平らげられて紙くずなどしかないというのに、店にしてみれば迷惑な話だろう。
「そうは言うけどなぁ」
と、康二がのんびりと表情を元に戻し、ふと思い付いたと言う感じの声を出した。「最近のメールしてる時のお前、かなり幸せそうやぞ」。
対して敦也は少なからず面倒くさそうな口調で返した。「あのな…。普通やっちゅうねん」。
康二は引かなかった。「いや、マジやって」。それどころか、今度は諭す口ぶりになって言った。「っつうかさ、ええやんけ、別に。恥ずかしがんなよ」。
すると、さすがにその言葉にはきっちりと反論せずにおれなかったのか、敦也は、妙に大人ぶったというか、生温い眼差しを浮かべている同い年の悪友に対して言った、いっそ断定的な口調で。「そもそも、会うどころか電話番号さえ知らん相手やぞ。そんな対象になるか」。
康二はそれを鼻で笑って一蹴した、「そんなもん、理由になるか」。さらに続けて、僅かに真面目な声で言った。「それが見知らぬ相手やったとしてもや。むしろ、見知らぬ相手やったからこそ、始められるもんもあるやろ。現に、お前もそうやったからこそ、わざわざメールなんか返したんやろうに」。
敦也は、何か思う所でもあったのか、真っ向から反論する事を止めて、代わりに数秒の沈黙の後で「っつうか、ちょっとナゲットでも追加するか」と店の奥にあるレジカウンターを指さして言った。どうやら食べ物でも与えて黙らせようという魂胆らしい。勿論、康二はそれを即座に却下した。
「誤魔化すなて」

「…別に、誤魔化すとかじゃ無いけどな」
「あっそ。それやったらええけどな」。言葉とは裏腹な康二の不満顔に、敦也は渋々といった様子で口を閉ざした。一度だけ頭を掻いて見せたのは唯一の抵抗だったのだろうか。
「一つ聞くけどな」
友人の沈黙がこの話題を続行する事への許可だとでも解釈したように、康二は間髪を容れずにそんな事を口にすると、返事も待たずに続けて問うた。「紀子ちゃんに遠慮してるとか、そんなん考えてたりするんちゃうやろな」。
敦也の回答は簡単かつ明確なものだった。「そんなんちゃうわ」。
康二もまた、その反応に「さよか」と軽く笑って応じた。それは友人を「軽い男」だと思って馬鹿にしている笑みなどでは決して無く、ただただ友人が卑屈になっているわけではない事を知って安心したらしい笑みだった。
「ほんまに、そう言うんじゃ無いんやって」。するとそんな康二の態度に、意固地になるのも馬鹿らしいと思ったのか、それとも単純にしつこさに根負けしただけなのか、理由はどうあれ、敦也も緩やかに顔から力を抜いて言った。
「じゃあ、何やねんな」
康二もまたその続きをのんびりとした口調で促す。敦也は僅かに考え込む風に黙してから、言葉を並べていった。
「お前の言った通りやて。本名も顔も、声さえ知らん、そんな相手や。どっちか片っぽのメルアドの文字をたった一つ変えるだけで、呆気なく切れる、そんな程度のほっそい絆や」
敦也はそこまで言うと一度だけ言葉を切り、かすかに真剣味を上乗せされた声を出した。
「せやけどな、そんな関係やからこそ、お互いに繋がれるって場合もあんねん。変に関係を深めようとしたら、逆に壊れてまうわ」。
康二は、敦也の言葉を途中で茶化すこともなく真面目に聞いていた。そしてそうだったからこそ、ややあって発せられた言葉は、きっと紛れもなく彼の本音だった。「…はぁ。また、小難しい事を。ほんまに、ややこい奴やな、お前は」。
康二は続けて言った。「それって結局、言い訳ちゃうんか」と。
「何やと」
僅かに敦也の声が硬くなる。だが、それでも康二は怯むことなく話し続けた。明るい店内の一角が、そこだけ外の風が吹き込んできたみたいに温度を下げた。
「そのまんまの意味や。それって、ほんまに相手の為を想っての言葉なんか」
「…どういう事や」
「紀子ちゃんの時もそうやったけどな。お前、そう言うのって、ほんまに相手に確認とかしてみた上での話なんか」
「そんなもん、わざわざ聞くもんでも無いやろうが」
敦也は康二の言葉に「何を今さら」とでも言いたげに返す。康二はそれに対して、彼の方こそそう思っていると言わんばかりの口調で告げた。「だからこそ、やろうが」。
「何がや」
「お前、前に自分で言ってたんやぞ。『メールで気持ちを伝え合うのは難しい』とか何とか」
「そうや。実際、その通りやんけ。っつうか、せやからこそ、何とか上手い言い方とか考

えるんやろうが。ほんでまた、相手からのメールも、ちゃんと意味を間違わん様に考えて読むんやろ」

無機的な文字。一方的な文章。無限の想いを伝えるにはあまりにも限定的で頼りなく不足する手段。けれどそうだからこそ、敦也はその中で出来うる限りの努力をすべきだと言う。言葉にしなければ伝わらず、言葉にした所で伝え切れるとも限らない想いだからこそ、何とか少しでも曲がらずに届けと必死になって伝えようとすべきだと。そして康二もまた、その意見に対して賛成らしかった。事実、彼は「あぁ、お前の言う通りや」と頷いた。けれど…。

「お前、ほんまに本気で考えてるんか」

康二は敦也の言葉に頷きながらも、そうだからこそ敢えて彼はそんな問いかけを生んだ。そのくせ、敦也がそれに答えるのも待たずに続けた。「お前の言う『考える』ってのは、気障ったらしい言い方やけどな、『相手の気持ちになって考える』って事やぞ。せやのに、お前はその考え方の中心に自分の気持ちとか先入観とか、それこそお前自身の考え方とかを入れてもうてんのちゃうんか。ましてや、本気でメールでしかやりとりを出来ん相手やぞ」。

「それは…」

何か反論しかけた敦也だったが、結局、彼は続きを言えなかった。それを見て、康二はさらに続ける。

「まぁ、確かに、今言った事は極論っちゅうか、もう『理想論』や。人間、そんな完璧なはずもないし、っつうかそもそも百パー完璧に相手の気持ちになれるなんて、それってつまりエスパーやん。そんな奴、おるか」

敦也は最早、一言も返せない。

「クミちゃん？クミさん？まぁ、どっちでも良いっちゃあ良いけど。別に、その子がお前にとってほんまに恋愛対象として映ってない相手やって言うんなら、それで良いわ。むしろ、ある意味じゃ男女の関係として理想型の一つかも知らんし」

「……」

「せやけどな。もしもそうじゃなくて、仮に誤解されたくなくて、一つの気持ちを伝えんのに、妙に小難しくて長ったらしい文章を作ったとして。だけど、それが実はそれを受け取る相手にとってわざと分かりにくくしてるだけ、とか、そんな考えが欠片でもあるんやったら、それはもう単なる言い訳やぞ。純粋に自分の本音を相手にぶつけるんが恐いからって、最初から逃げ道を用意してるようなもんやからな」

「そんな事は…」

おそらく、この時、敦也は「無い」と言おうとした。けれど、彼はそれをちゃんと言葉にする事が出来なかった。それどころか、他のどんな言葉さえ吐き出す事が出来なかった。その事実こそが、完全にとまでは行かなくとも、それでも多少なりと康二の言葉が胸に刺さっているという事の証明でもあった。

「お前、結局は格好付けて、単に相手を信用してないだけとちゃうんか。頭のどっかで、『どうせ、こいつには俺の言ってる事のほんまの意味なんか分からへんやろ』って、そんなん思ってたりせぇへんか」

それは疑問形をしていながらも、最早「問いかけ」ではなかったのだろう。事実、康二

はまるでその言葉に対して敦也が何かを言い返してくるのを待つつもりなど無さそうだったし、また敦也もそれを感じていたのか下手な弁解や屁理屈を口にしたりしなかった。
「もしも、万が一やけど、そんな事を少しでも思ってたりしたんなら。それで『自分の事を相手が考えてくれんかった』とかっつーのは、あんまりにもその相手が可哀想やぞ」
康二はそう付け加えた後で、今さらながらもフォローする為か、こう言った。「勘違いすんなよ。別に、無理にそのクミって子に告白しろとか、紀子ちゃんの事を後悔しろとか、そんなん言ってるわけじゃ全く無いからな」。
「……分かってるわ」
敦也はそんな康二に対して、数度、がりがりと頭を掻いた後で、苦笑いにさえ失敗したような弱々しい表情で言い返した。それからさらに続けて、ぶっきらぼうに「偉そうに、何様やねんお前」。
「まぁ、自分でも、ちょっと『俺の方こそ格好付け過ぎたな』と思ってる最中や」。康二は敦也の態度に怒った様子もなく、と言うかむしろ照れくさすぎてそんな余裕もないのか、困惑気味な笑みを浮かべた。
「アホか」と、敦也は気の置けない口調で悪態を吐いた。「うるさいわ」と、康二が笑いながら言い返した。
「ちょっと前に、彼氏と別れたばっかりやってんと」
と、唐突に敦也が何気ない口調でそんな事を言った。
「は？」
「クミの話や」
そしてあまりにも突然の話題の変更に思わずと言った感じで間抜けな声を上げた康二に、視線を窓の外の通りへと向けた敦也は、やはり何処かぼんやりとした口調で話し始めた。季節を先取りする癖のある街は、いつしか冬の装いを纏っていた。
「結構、長く付き合っててんと」
「へぇ…」
曖昧に頷く康二だったが、ちゃんと話は理解しているようだった。敦也は話を続けた。
「か～なりショックやったらしいわ。っつか、当たり前か。密かに結婚とか期待してたみたいやし」
「そうやったんか」
「んでまぁ、だいぶと凹んだりしてたらしいんやけど。…そんな時、や」
敦也は言葉を切ると、ポケットから携帯電話を取り出した。だが、それだけで、彼は携帯電話を開く事もなく話を再開した。相変わらず、二人は視線を交わさない。
「あんまりにも暗(くら)なってるクミを励ます為に、職場で仲の良い同僚とかが合コンを開いてんと。勿論、良かれと思ってな」
「あぁ」
「ただなぁ～。どこから見つけてきたんか知らんけど、その相手が、ちぃっとばかし悪かったっつうか、酒と雰囲気に流されたあいつが悪いっつうんか…。ま、『振られた直後の奴は落としやすい』っつうのは、多分、全世界共通のことわざやろうしな」
「ことわざでは無いけどな。でも、確かにその通りやろ」
敦也の言葉にさり気ない突っ込みを入れつつも、康二は素直に首肯する。敦也もまたそ

れに対して揚げ足を取る事もなく言葉を続けた。「周りの隙を見てって感じで、メモを渡されたらしいわ。その男の電話番号とメルアドが書かれた」。
「ふ～ん。で？」
「最初は警戒したりもしたらしいんやけど、まぁ、防御力が弱ってる時には大して長続きもせんかったりするわな。アドレスとかも先に向こうから渡されてるから、主導権とか自分が持ててるって気にもなるし」
「ま、しゃあないんかなぁ」
「しかも、実は結構、好みのタイプやったらしいしな。とりあえず、その後で自分も番号とアドレスを書いて渡したんやと」
敦也の口調に大きな変化は見られない。だが、だからといって彼が何も考えていないと断ずるのはあまりにも早計だろう。それが分かっているからこそなのか、康二もまた態度に変化を生じさせていなかった。
「さすがに、『その日の内に』って事は無かったみたいなんやけどさ。でも、合コンがお開きになってから、即行で向こうから電話が掛かってきたらしくてな。そのまま色々と慰められたり、別の話題で盛り上がったりしてる内に、あいつも徐々に気を許してったみたいで…。…んでま、さらに次の日も仕事終わりのどんぴしゃのタイミングで電話が掛かってきてんと。それで、そのまま翌日の晩には……みたいな？」
「なるほどなぁ」
最後だけおどけた風に軽く語尾を上げて見せた敦也に、康二は小さく肩をすくめる事で応じた。言外に「そう言う時もあるやろ」と言っている仕草だった。
「ただなぁ、問題はそっからやねんなぁ～」
敦也は溜息混じりにそんな呟きを吐き出すと、携帯電話を開いて、それを軽く手首で揺らしながら言った。「さらにその翌日から、今度は逆に全く連絡が取れんようになってんな」。
康二が「あぁ、電話を無視されたんやったな」と返した。
「せや。まぁ、冷静に考えれば『ヤリ逃げされた』ってだけの話なんやろうけど、当人にとってみたら堪らんわな。しかも、そもそもの理由が理由やろ」
「間違いないな」
「挙げ句の果てに着信拒否されて、しかも、せやったらってメールを打ったら、何やメモのアドレスが違ってたんか、全くの別人に届く始末やでな。まぁ、手書きのメルアドで、その上かなり汚い字やったみたいやからな。今となっては、その男が適当に嘘のメルアドを書いてたんか、それともクミが勝手に間違えてしもたんかは、分からんのやけど。どっちにしろ、ツイてない事には変わりないわ」
「とりあえず最初の内はメールのやりとりとかだけにしときゃ、話も変わってたやろうに」
「ほんまにな。でも、そうはならんかった。色々とタイミングもあったんやろ」
そしてまた、結果としてクミのメールが敦也の携帯電話に送られた事にも、変わりはない。だとすれば、もの凄く好意的に解釈すれば、最終的には「結果オーライ」と言えない事も無いのだろうけれど…。
「要は、お前は、実は結構その子の事を気に入りっつうか気になりだしてるんやけど、かといって弱みにつけ込む的な真似をするのはその男と同じに思われるかも知れないから、

それが恐くてひたすら『いい人』としてメールの文面に頭を悩ませてる、と。そう言う事でええんかな」

身も蓋もないと言える指摘に、敦也は「…せやから、関西人っつうのはデリカシーに欠けるんや」と、自らの出身地を完全に棚上げして嘆息した。「お前も関西人やろ。っつうか、『デリカシー』って、ほんまに意味を分かってんのか」という康二の問いかけは、呆気なく無視されて宙に散った。

「それになぁ。正確にはよう知らんけど、向こうは関西の人間ちゃうらしいしな。関東の方らしいわ。まぁ、メールって独特やし一概には言えんだとしても、それでも言葉遣いとかも何やあっち系の人間っぽいし」

どうしたもんかなぁとでも言いたげな敦也の呟きに、康二もまた「まぁなぁ…。今さら遠恋ってのも、ちょっときついもんがあるんも確かやけどなぁ」と独り言に近い呟きを返した。

「それに、そもそもぶっちゃけたら、向こうがどんなつもりでおるんかも分からんしな」。敦也がかすかに投げやりになった口調で言った。

「それは、まぁ…」

康二は言葉を濁す。そしてそのまま黙る。ただしそれは言うべき言葉を何一つ思いつけないからと言うのではなかったのだろう。どんな前置きをしていた所で、詰まる所「最も大切な事」など限られているのだから、そんな話は今さらだ。

「お前がややこいんは、もう性格を通り越して運命やな」

やがて康二は切ない沈黙を埋めようとしたのか、やけに明るい声を発した。

それを受けた敦也は「アホか。そんなもん、あるか」と真っ向から否定した。その上で、ぽつりと言った。「難しいだけやっちゅうねん、色々とな」。

すると康二もまた、最初から運命論など本気で信じていなかったのだろう、あっさりと頷いてから「って、お前は幾つやねん」。

敦也はそれに笑って返す。それだけで、二人の間の空気が一気に軽くなる。

「ぴちぴちの二十歳(はたち)と少しや」

「アホ。世間的にはその『少し』が重要なんや。っちゅうか、『ぴちぴち』って、それこそマジで何歳やねん」

ファストフード店の片隅で始まる漫才めいたやりとり。観客席とでも呼べそうな二人の正面に広がる通りでは、何組もの恋人同士が身を寄せ合いながら歩いていた。

6

《どうしよう…》

そんなメールに敦也が起こされたのは、もうしばらくすれば目覚まし時計の光る針が深

夜の三時を示す、そんな頃の事だった。
最初、敦也はクミへの返事をとりあえず明日（と言うか今日）の朝に先延ばしして睡眠を再開しようとした。…が、布団を被ったものの、結局は無視しきれず、彼は覚醒しきっていない頭を無理矢理に目覚めさせるように両手で掻きむしってから、改めて枕元の携帯電話に手を伸ばした。正確な時刻は〈午前二時四十二分〉だった。
〈どしたん？〉
簡単な文章を手早く打ち込んで送信。そうしてから、敦也は「うー…」と唸り声じみた音を発して枕に顔を押しつけた。返事はすぐさまやってきた。
《電話がきた》
絵文字どころか句点もない短文に、初めの内は寝惚け眼を向けていた敦也だったが、けれど徐々にその意味を理解したのか、彼は「え」と大きめの声を上げて上半身を起こした。ベッドが「ギシリ」と非難するみたいに鳴き、温かそうな布団は呆気なく敦也の体から滑り落ちた。しかし、当の敦也はそんな事に構いもせず、冷えた部屋の空気にTシャツ一枚を纏っただけの肌を晒しながら慌てた様子で携帯電話のボタンを押した。
〈どういう事や？〉
再び返事は早かった。
《さっき、急に電話が掛かってきて…。無視したんだけど…。》
さらに一行開けてから、《…どうしよう？》。
「どうしよ、って…」
敦也は戸惑いの中にも仄かな苛立ちを潜ませた声を漏らした。それから頭を掻きつつメールを打つ。文章はあっという間に完成した。
〈考えるまでも無いやろ！さっさと拒否しろよ！〉
…だが、彼がそのメールを送信する事はなかった。代わりに舌打ちを一度だけ。
やがて室温に凍らされたように動きを止めていた敦也は、緩慢とした動作でその本文を全て消去し、一から文章を作り始めた。
〈今さら、どうしようもないやろ？また都合良く遊ばれる〉
だが、そこで再び敦也の指が動きを止めて、一瞬後にまた動き出す。画面上のカーソルが少しだけ戻り、〈？〉から後の文章が削除された。
〈今さら、どうしようもないやろ？あんな酷い男なんか相手にしてたら、クミの方がまた色々と辛い目に遭うかも知れんし。〉
そして改行された後に、文章は〈夜も遅いし、早く拒否して、ゆっくりと寝な〉と続けられ、最後は「笑顔」で締めくくられた。
しかしようやく仕上がった文章を見て、もっと正確には最後の一文を見て、敦也は何が気に入らないのか、指先で弾く風に頭を掻きながら眉間にしわを寄せる。
およそ一分後、文章は三度（みたび）、最後の部分を作り直された。
〈変に悩んで体を壊したらあかんし、早く拒否して、ゆっくりと休み〉。末尾は「穏やかな微笑み」の絵文字へ変えられている。
そうしてやっと納得出来たのか、敦也は完成したメールを送信した。暗い部屋に、液晶画面から洩れる明かりで薄ぼんやりと影が生まれる。
灯りを付ければ良いだろうに、敦也は何故だか真っ暗な部屋で小さな画面だけを凝視し

ていた。何度か肩が小刻みに跳ね、彼は上半身に巻き付けるように布団を被った。体の前で重ねられた布団の隙間から、片方の手だけがにょきりと生えた。

クミからの返事は、少しばかりの間を空けてもたらされた。時刻はもうじき午前四時になろうとしていた。

《そんな簡単に言わないでよ…》。末尾に添えられた涙色が、白黒の画面を儚く飾っていた。

敦也はまず、純粋に驚いたらしかった。だが、それが過ぎ去った後には、別の感情がやって来たのだろう。静かな部屋に「何やねんなそれっ」と声が響いた。

〈簡単になんか言ってないよ。ただ、クミがまた傷つくかも知れんのが、嫌なだけや〉

最後の部分をどうするのか、敦也は幾つかのパターンを試してから、結局は〈。〉で締めくくった。点滅する画面が、敦也の吐息をうっすらと宙に浮かび上がらせた。

敦也は無言になった。部屋は静かになった。

細い針は着々と淡々と時を刻む。数回、敦也は新規メールの作成画面を呼び出した。だが、その度に一文字としてそこに打ち込む事なく、そのまま画面を元に戻してしまうだけだった。じわじわと、彼にはどうする事も出来ないまま今が削られていく。

敦也の息づかいも、時計の音も、時折ほんのかすかに窓から入る車の音も、全てが部屋の一部として溶け合って、そこは凍りついた静寂で包まれる。いつしか携帯電話の画面も暗くなり、室内は本当に変化を消した。

それでも彼は待っていた。彼女からの返事を確信しているかのごとく。

それからさらに四十分。果たして、携帯電話が唐突に明るい電子音を響かせた。

《でも、今わたしの周りにいてくれるのは、その人だけだし…》

文末には「静かな泣き顔」がいて。その下には、色のない文章が綴られていた。

《ねぇ、一つだけ聞いても良い？》

敦也はやはり黙ったままだった。ただ、かじかんでいるのか指先をぎこちなく動かした。普段は気にもならなさそうな小さなボタンも、今の彼にはやけに押しづらそうだった。

〈何？〉

たったそれだけを送り返すのに、敦也は五分を要した。呆気なく〈送信完了〉の文字は現れた。

敦也は再び待った、声もなく。その間、彼は携帯電話ごと手を懐に入れていた。

やがて、部屋の雰囲気にあまりにも場違いな軽い電子音が、動きを止めていた部屋を満たした。クミからの問いかけは、それが届くまでに掛かった時間に比して、とても簡潔な内容だった。

《あなたはどうして、私とメールをしてくれているの？》

敦也はその問いに、たった一度だけ目を通すと、すぐさま返信の為の操作をした。少なくとも、そこまでは早かった。

滞りなく現れるメール作成画面。敦也は指を止めた。

「…そんなん、今さらやんけ」。敦也の唇が傍目には分からないほど、かすかに動いた。薄い呟きは、風もないのにあっという間に暗い宙へ流れて消えた。

新しく生えた敦也の手が頭を掻いた、少し強めに。それからようやく携帯電話を持った指が動き出した。滑らかにとは言えないけれど、それでも止まることなく動き続けた。

〈それは、最初は些細な偶然で知り合った程度の仲やけど。でも、そうやったからこそ今みたいに真面目な話のやりとりとか出来てて〉

途中で何度も何度も文字を消し、文章を作り直し、敦也はメールを打ち続ける、彼女への「答え」としての。

〈でも、俺はいつもクミの傍にいてやれる事は出来んし。せやけど、そんな俺でもクミの為に出来る事があると思って。っつか、俺にしか出来ない事があると思って、〉

改行するべきかどうか、句点や読点を挟むべきかどうか、いっそ文中のたった一文字を変えるべきかどうか、そんな些末と思えそうな事にさえ、敦也はいちいち悩んでいるのか画面上のカーソルをひっきりなしに上下左右へ動かしている。

〈もちろん、それだけじゃなくて、単純にクミと話すのが楽しいし。だからこそ、クミが笑ってられるようにしたいと思うんやし。せやからこそ本気で言葉を贈りたくて、きつい言い方とかするつもりはないけど、それでも『それはアカンやろ』って思うことはちゃんと言うべきやと思うから。〉

いつしか画面の大半は文字で埋まり、余白はちらほらと文字の隙間に見えるだけ。上から下へと黒い画面が流れていく。

敦也の指は、まだ止まらない。

〈クミが寂しかったり辛かったりすんのも分かるし、無理して急いで元気になろうとするなんて余計にしんどいだけやろうけど、それでもやっぱりクミにはちょっとずつでも前に進んで笑っていてほしいから。〉

妙に饒舌な文章は、果たしてどんな気持ちの現れか。それを伝える為に二人の間にあるものは、ただ無機的な電波が介す二次元の言葉だけだ。

〈クミから楽しそうなメールとかもらったら、俺も嬉しいし。〉

そうしてようやく、敦也が最後の一文を完成させ、その手を止めた。

そこにはこうあった。

〈クミとメールしたいから、してんねん。〉

送るべきメールが完成しても、敦也はすぐにそれを送ろうとはしなかった。

彼は最初からもう一度、出来上がったそれを読み直し始めた。

頭から尻へと、画面上を細かな文字が生き物さながらに整然と動く。それを追って敦也の黒目もせわしなく動く。とんとんと、空いている方の指先で頭を叩きながら。

途中、幾度か表現が打ち直され、はたまた一部が削除され、全く別の一文が追加される。そしてまた敦也は新しくなったメールに視線を走らせる。なぞるように、撫でるように、敦也は何度も何度も何度も完成したはずの文章を確かめる。

そうやって、ようやく彼は納得することが出来たのか、長々と息を吐いてから「回答」を送信した。彼がそれを作り始めてから、ずいぶんと長い時間が経過していた。

送信が完了するまで、敦也はずっと画面の中を見つめていた。

十五分後、クミからの返事は届いた。そこに絵文字や顔文字は無かった。

《…もう、良い。ありがとう。》

一行開けて、《でも、私が欲しかったのは一言だけで良かったのに…》。

それに敦也はまたしてもメールを返そうとして……けれど結局は空白のままだった画面を消して、携帯電話を閉じた。それ以上、敦也がどれだけ待とうとも、クミからのメール

は届かなかった。彼もまた新たなメールを送らなかった。
時刻はいつの間にか午前六時を過ぎていた。
そのことに気付いた敦也は「寝るんは、もう無理やな」と呟き、畳んだ携帯電話を枕元に置いて立ち上がった。
敦也が窓のカーテンを開けた。冬の夜明けは遅く、それでも部屋は変わらず暗い。
「何やねんな、マジで」
口からこぼすように言った敦也は、カーテンをそのままに部屋の灯りを付けた。
途端、明るく照らし出される見慣れた室内。窓ガラスに映る酷く不健康そうな男の顔。
ベッドの上に布団の山が出来ている。
「…何やねん」
振り返った敦也はそれを見て、もう一度、小さくそう吐き捨てた。

7

言葉を紡ぐ事は、それを出来るという事は、果たして喜ぶべきなのか、それとも恐れるべきなのか。
勿論、それは時と場合によりけりだろうし、またそれをする人間によっても結論は容易く変わってしまうのだろう。ましてや、相手が顔の見えない、声さえ届かない場所にいるのだとすれば、尚更その答など一概に決めつけられるものではないのだろう。
果たして、敦也もまた悩んでいた。かれこれ二時間以上、ベッドの上で携帯電話を眺めていた。
新規メール作成画面。そこで唯一、文字が打ち込まれている本文欄には短くこうあった。
〈好き〉
けれど彼にそのメールを送る気配はなかった。ずっと、送る事も消す事もせず、それを眺め続けていた。
「無責任やんけ」。敦也がぽつりと言った。
それはどんな意味での言葉なのか。華やかな単語とは裏腹に乾いた表情から、その内心を読みとる事は出来ない。いや、どうとでも読みとれるだろうからこそ、真意が判然としない。「だって、遠いやろ」。再び敦也が誰もいない部屋で言葉を発した。
先ほどからずっと騒がしい声を上げているテレビは、全く見向きもされていなかった。ゴールデンタイムのバラエティー番組は単に静けさを払う為だけの価値しか持ち得ていない。きっと沈鬱なニュース番組でも同じだっただろう。
何度目かのやりとりの際に、敦也は、彼女が神奈川県の厚木と言う所に住んでいるのだと聞いた。勿論、敦也にそこを訪れた経験など無いし、ましてやそこがどんな街であるのかさえ知らない。そもそも「神奈川県」と言われた所で、その時の彼は漠然と「関東の方

か」と言う程度にしか感じていなさそうだった。
ただ、それでも一つだけ確かだったのは、そこは敦也が住んでいる場所とはあまりにも遠い街だという事。康二が以前に漏らした言葉は、そのまま彼らにとっての本心であるだろう。
だが、本心が一つであるとは限らない。そんな事は、今の彼の姿を見れば一目瞭然だった。どれもが偽りではなく、全てに真実が含まれているからこその葛藤だ。
悩む様子の敦也に対して、康二のアドバイスはあっさりとしたものだった。
「ええ加減、素直んなれよ」
苦笑いを浮かべながらそう言った康二の眼差しには、どんな想いが込められていたのか。
その言葉に対して黙(だんま)りを決め込んだ敦也に、康二はもう一つだけこんな事を言った。ただし、それは一方的な助言と言うよりも、多分にからかいの要素も含まれていた気安い口調のものであったけれど。「男の格好良さは、気取るだけじゃないやろ」。勿論、硬い口調でないからと言って、真摯でないとは限らない。
敦也は気の置けない友人に対して、結局、短く「分かってるわ」と返しただけだった。
あの日以来、彼女から敦也の携帯電話にメールは届いていない。
敦也もまた、彼女へメールを送っていない。送ろうとした事は何度かあったのだけれど、それでも最後には出来上がった文章を全て消去してしまっていた。長々と時間を掛けて綴られた言葉は、ほんの一瞬で消えて無くなった。
果たして、彼女は本当に例の男と連絡を取り合っているのだろうか。いや、もしかしたらもうすでに付き合い始めているのかも知れない。それどころか、いっそ楽しげに笑い合っているのかも知れない。
自分はまだ間に合うのか、それとも手遅れなのか、終わった事なのか、続いている事なのか、何一つとして確かめられないもどかしさと不安は、きっと分からないからこそ消えてくれもせず心を惑わし続けるのだろう。解決策など、たった二つしかないと理性が幾ら語りかけてきていたとしても。
「分からんっちゅうねん、自分でも」
敦也が開き直ったとも取れる声を上げて携帯電話を手放し、ベッドの上で仰向けに寝転がった。
「会(お)うた事もない相手やぞ。顔さえ知らん相手に、マジになれんかよ」
敦也はおかしくない事を無理矢理に面白くしようとでもしているかのように、「ありえへんやろ」と嘲笑めいた軽い声音で言葉を紡ぎ続けた。「ほんま、そんなんただのアホやんけ」。止まらないのか、止められないのか、止めたくないのか、敦也は平らな天井に向かって声を投げ続ける。刹那も要らずに声は跳ね返って彼へと戻る。「考えるまでも無いやろ、普通」。
敦也は笑っていた、それは確かだ。
同時に、見ようによっては何かを堪えている風にも見えた。それがさらなる笑いなのか、それとも別のものなのか、それはきっと敦也にしか分からない事であろうし、そもそも彼にだってちゃんと把握し切れていないのかも知れないけれど。
と、そこで敦也が不意に言葉を切って大きな溜息を一つ。直後に「ダッサいな」と、表情を消された彼の口が続いて吐き捨てた。

「……」

うって変わって言葉を止めた敦也が、上半身を起こす。ぐしゃぐしゃと、両手で頭を掻きむしる。「あーっ」と、目を閉じて乱暴に手を動かす。わしゃわしゃと言う音が唸り声と共にテレビの音を掻き消した。

「くそっ」

やがて、始められた時と同様に、唐突に彼の両手が動きを止めた。そして枕元に転がっている携帯電話を拾い上げ、ベッドの上であぐらを掻いた。

直後、彼の指が動いた。電源ボタンを連打する親指。〈好き〉の二文字が、画面ごと消され、液晶は見慣れた待ち受け画面へと戻った。

敦也は、無言でそれを見つめた。あれほど彼を悩ませていた文字は、もう跡形も残っていない。彼自身が一瞬で全て消し去ったのだから。

それでも彼は小さな画面を見つめる。黒いプラスチックの塊を握る指に、さらに力が込められる。彼は携帯電話を手放さなかった。

敦也は、再び指を動かした。

急いでいる様子はなかった。澱んだ動きでもなかった。淡々と、成すべきことを為すだけとでも言わんばかりに、敦也が携帯電話を操作する。

先ほどまでと同じ、ただしまだ真っ白の、メールの作成画面が現れた。

空いている方の手で軽く耳の後ろの毛先を引っ張りながら、敦也がボタンを押した。彼は何よりもまず〈宛先〉の欄を埋めた。アルファベットと記号の羅列が、そこに丁寧に配置された。

続いて、敦也は〈題名〉の欄に文字を入れた。

〈これが俺の本音です。〉

幾通りかのパターンを試した後、結局、敦也はそんな文章だけをそこに入れた。それだけで、結構な時間を掛けていた。

そうしてようやく、彼は本文へと取りかかる。

けれどその指は滑らかに動き出したと思った途端、いきなり止まって、ボタンの上で宙をさまよう。そんな事を何度と無く繰り返す度に、彼は首を振ったり頭を掻いたりした。時折、組まれた足が膝を揺らして小刻みに動く事もあった。

それでも徐々に、着実に、敦也は文章を紡いでいった。無機的な文字が様々に組み合わされて、何とか彼の気持ちをありのままに伝える為の形に整えられていく。

そうやって、敦也は世界中で彼だけの言葉を作っていく、彼女の為だけに。

やがて出来上がった文章は、一方的だとさえ思えるほど、まさしく敦也の素直な気持ちを表しているだろうものだった。

〈クミに本当に恋しているのかどうか、正直、今の俺にはまだ良く分からない。だから軽々しく『好き』って言葉も、本気だからこそ送れない。でも…〉

そのまま改行。

〈それを確かめる為にも、俺は今すぐにでも、クミに会いたい。そしてクミにも、俺の言葉を直接に聞いてもらいたい。〉

さらに二行ほど間を置いて、それは綴られていた。

〈せめて告白くらいは、ちゃんと目を見て伝えたいよな〉

一番最後は「笑った顔」、明るい色。それはきっと彼なりの照れ隠し。だけど同時に本心でもあるはずだ。それだけは、今の彼の顔がそのまま物語っていた。

敦也は、一度だけメールを読み返すと、ちらりと時計に目を走らせてから、何も変えることなくそれを送信した。

ひらひらと、敦也の言葉が飛んでいく。

間もなく送信は完了した。敦也は携帯電話を閉じてその場に置いた。

「風呂入るか」

勢いよく背中を反らして骨を鳴らした敦也が、のんびりと立ち上がる。「今日は久しぶりに湯ぅ入れよ」。そう言って部屋を出て行く。じきに届いてくる浴槽を叩く水音。

絶え間ないテレビの音と、温かい水音と、さらには何と下手くそな鼻歌までもが少しずつ混ざり合って部屋を満たす。

そこに新たな音が加わるのは、それからおよそ三十分後。

8

クリスマスを目前に控えた連休の街では、新幹線の窓から見える景色だけでも、飾りの色合いと相まって、そこを歩く人の雰囲気までもがいつもと少し違って見える。ましてやそこは、普段の彼が生活している住み慣れた場所とは大きく離れていた。勿論、だからといって同じ日本である事に変わりなど無いはずなのだけれど。

どうも妙なライバル意識でも持っているのか、プラットホームに降りてからの敦也は、やたらと周囲を見渡しては、エレベーターの乗り方の違いなど些細な事にいちいち驚いたり、馬鹿にした顔で笑ったりしていた。端から見れば、ただの「お上りさん」だ。

それこそ「神奈川県の厚木」でも良かったのだ、待ち合わせ場所は。けれど敦也と彼女は結局、東京駅で落ち合う手はずになっていた。

当初、『すぐに帰らないといけないんだから、落ち着ける場所にしようか』と涼やかな標準語で言ってくれた彼女の提案に、「すぐに帰らんとあかんのやから、どうせなら思い切り楽しめる所の方が良い」と敦也が頼んだのだ。その時に彼が部屋で漏らした「っつか、あんまり向こうの地元やと、こっちが格好付かんからな」と言う独り言は、携帯電話を口から離していたおかげで彼女に聞かれているはずもない。それに現実問題として、東京駅なら新大阪駅から新幹線一本で行けるので、見知らぬ土地に向かう敦也にとっては気が楽だったのだろう。康二にからかわれながらも、彼は雑誌やインターネットでしつこいくらいに目的地の情報を集めていた。

広い構内を敦也は案内板と手元の携帯電話を頼りに進む。前日の内に、彼女から待ち合わせ場所までの道順がメールで送られていた。

周りの人間を軽く追い越しながら、敦也は人込みの中を慣れた足取りで進んだ。

彼女の顔は、少し前にメールに添付されていた写真によって敦也も知っていた。とは言え、実際にそれだけでいきなり会って本人だと確信出来るかどうかは定かでない。敦也の方こそ、彼女に送る為の写真は、携帯電話のカメラで十二回も撮り直した挙げ句に、そこから二十分も掛けて「良いやつ」を選び抜いていたのだから。だから、もしかしたら画像の中の「クミ」は「特別に綺麗に映っていた」だけであって、実際にはまるで違う外見なのかも知れない。

しかし、それでも敦也の歩調は澱まない。必要以上に期待しすぎていると言うわけではなく、単にそもそもの期待感だけで十分と言った様子だ。

果たして、これから本当に恋が始まるのかどうか、彼だけでなく彼女にだってまだきちんとは分からないだろう。ましてや、淋しさや距離に負けずに想いを抱き続けられるのかどうかなど、始まってからようやく実感していける想いなのだ、今から確証など持てるはずがない。

それでも現時点ですでに確かだった事は、敦也の心が弾んでいると言う事実。

さらにもう一つ。彼には、彼女へ直接に届けたい「本心」があるらしい事実。

やがて目的の場所が近付いてくる。華やかな看板や広告、種種の店舗が並び、地下を忘れるくらいに明るい雰囲気。けれど敦也の視線はそこに来て一転、周囲ではなくただ一点へと向けて注がれていた。

携帯電話の画面に浮かぶ文字列を、そのまま生き生きとさせた看板の手前。流れる人込みの中では逆に、ただ立っていると言うだけの方が目立って見える。

一瞬だけ足を止めていた敦也が、再び歩を進める。先ほどまでよりもほんの少しだけ、足早になる。

と、相手の方も敦也に気付いたらしい。女性にしては少しばかり背の高い体が、ゆっくりと敦也の方へ歩き出した。

言葉もなく、一直線に二人の距離が縮まっていく。

彼女の下まではもう約二十メートル。今ならきっと、メールよりも電話よりも、そのまま駆けていった方が早い。

通路に映える目印代わりの白いコート。

敦也の足が弾むように軽くなる。

〈了〉